

# 静岡市大河内地域における持続可能な地域運営と茶業経営

静岡大学 地域創造学環 阿部ゼミ

指導教員：教授 阿部耕也

参加学生：矢五田萌加、北嶋泰成、金瀧芽生、菅野惇  
星野海輝也、田崎碧、三浦真、中垣乃彩、齋藤しずく  
中橋幸作、木下皓貴、佐藤快成、綿引駿

## 1 要約

良質な茶葉の生産地として活気があった静岡市大河内地区は、今では少子高齢化と茶業の低迷で、地域の誇りや元気が失われている。茶業の新たな担い方・活かし方を検討し、今後も持続可能な地域運営をはかる方策を考えるため、大河内地区のほか、川根本町、島田市あるいは飛騨市等で展開する事例を視察し、ヒアリングを行った。NPO法人かわね来風が農家や企業、行政と連携しながら川根本町を活性化している取り組みは示唆に富み、また飛騨市における地域の主体をつなげる仕組みや課題を資源に転換する仕掛けは、大いに参考となる事例であった。調査結果を活かし、大河内地区の資源・特性を生かした地域活性化策を提言した。

## 2 研究の目的

安倍川中流域に位置する大河内地区は、茶業を中心とする農林業で地域を支えてきたが、少子高齢化と茶業の低迷により、耕作放棄茶園や空き家が増加し、過疎化が進行している。しかし、この地域の自然環境には癒しをもたらす効果が期待でき、栽培される茶は甘みがあり質が高い。昨年度の調査結果を引き継ぎながら、地域住民が地域に誇りをもって住み続けられるよう、恵まれた自然環境と茶栽培の伝統を活かした取り組みや仕掛けを共創する。

## 3 研究の内容

昨年度に引き続き大河内を対象とし、その持続可能な地域運営を考える手がかりを得るため、県内では川根本町のNPO法人かわね来風取材し、また県外では飛騨市での実践事例を調査することとした。また、昨年度に引き続き、大河内小中学校の取り組みと地域とのつながりを視察・体験するとともに、大河内における茶業の過去と現在を体現する平野茶工場を見学し、ヒアリングを行った。

### (1) かわね来風の取り組み

前回ゼミ代表を務めた久保山健太氏は卒業後川根本町のNPO法人かわね来風に就職し、川根本町において様々な活性化・教育事業を担当している。持続可能な地域運営という点で示唆的な取り組みであると考え、ゼミに見学と意見交換の場を設けてくれた。

かわね来風は設立当初から川根地域の課題に向き合い、地域がもともと持っている資源を使って地域活性化・教育活動を展開してきた。「恵まれた自然につつまれた「川根」のちからで癒しと安らぎをおすそわけ」という目標は本事業の課題とも重なる。川根本町は賀茂地域とならび県内で最も少子高齢化と人口減少が進行している地域で、経済の縮減、さらなる過疎化という悪循環に陥っている。そうした状況に対応しようとするさい、外からの解決を待つ方向では、一時的に解決できたとしても持続可能な地域運営にはなりにくい。地域の自然・歴史や文化・人材を掘り起こし、解決のための地域資源（川根のちから）として活かす方向にこそ持続可能性が見いだせる。かわね来風が目指す方向性は、いわば「まちづくり資源の地産地消」である。



民泊・桃ん澤での餅つき体験



徳山の盆踊り（鹿ん舞）



かわね来風の事業内容

地域の農家、店、企業、学校と連携・協働を進めながら活動を行い、運営を任されているキャンプ場も教育、地域づくり、観光の拠点として活用している。川根直送便、農家民宿、特産物開発など地域の課題を受けてかわね来風が始めた事業は、軌道に乗ってから連携相手に委譲するなど地域の自立を目指して活動を進めている。行政とは少子高齢化への対応、観光客・移住者の受け入れ、川根本町の持続可能な発展全般について連携・協議を行っている。キャンプ場運営と放課後児童クラブの受託を通して雇用を生み、川根町出身者の定住・Uターンを促進するなど、教育と地域づくりを結びつけた活動となっている。

地域づくりと教育への関心は、それらが地域の持続可能性に直結するからだと考えられる。どちらも世代をまたいだ時間を要する取り組みであるが、川根本町におけるかわね来風の試みは、かつて栄え、今は低迷期にある茶業を主な生業とし高齢化と若者の流出という共通点をもつ大河内地区にも示唆に富むものであるといえる。

## (2) 飛騨市における地域活性化の取り組み

飛騨市調査は地元出身の学生が企画を担当した。市長のガイドによるまち歩き、高大連携ワークショップ、廃線の鉄路を活用したアクティビティ体験など盛り沢山だったが「飛騨市の関係案内所・ヒダスケ！」という仕組みは特に興味深いものだった。農作業、古民家の活用など多種多様な「困りごと」と手助けする人をつなげるシステムで、飛騨地域の様々な仕事、生活、歴史文化、自然を体験しながら人と人がつながっていくプログラムであった。

レールマウンテンサイクルで溪谷を走るガッタンゴーは爽快な体験を提供してくれる観光コンテンツだが、旧神岡鉄道の線路という地域資源を活用したアクティビティである。数キロに及ぶ鉄路は維持するにしても撤去するにしても経費がかかり地域のお荷物になりかねなかったが、利活用することで神岡ならではの観光資源となっている。飛騨市を人口減少先進地と位置づけ、外から解決策を求めるだけでなく、地域に眠っている資源を掘り起こし、活用することによって、様々な課題を解決・改善しようとする姿勢がみられる。持続可能な地域運営の好例といえる。



飛騨市の人がちょっとやってみたいことや困りごとの種、アイデアが集まり誰でも参加できる、飛騨市と関わるためのプログラムです。

いま飛騨市は、色々な「お助け」を求めています。おいしいお米のおいしさを世界に発信したい、歴史ある博物館の魅力を盛り起こしたい、古民家のおもしろい使い方を生み出したい……。それは、私たちにとっては「お助け」ができません。でも、あなたにとってはそれは「ワクワク」がかもしれません。

ヒダスケ!は、飛騨市の「お助け」と「ワクワク」のポジティブな出会いをつくるサービスです。

ヒダスケ! HP より

## (3) 平野茶工場の見学とヒアリング

昨年度聞き取りをした大村自治会長は「この地域では最盛期はお茶を1年に四番茶、五番茶まで作っていた。それだけ昔は需要があった。この地域のお茶は『本山茶』と呼ばれ、高い値段で取引されていた」という。現在は茶業の低迷を受け閉鎖され丸福製茶が引き受け使途を検討中とのことだった。見学当日は丸福製茶の方々に茶工場を案内いただき、多数の機械の用途を聞き、茶の製茶工程について解説いただいた。特に印象に残ったお話は以下の通りである。



平野茶工場の見学とヒアリング

調査者は、静岡にいながら製茶の奥深さを知らずにお茶を飲んでいて、各地のお茶が違う土壌・アプローチで作られ、味や香りも様々だということに気づかされた。安倍川流域で栽培されるお茶の美味しさ・香りに注目し、指名買いをしてサポートしてきた丸福製茶の情熱と現状への危機意識が感じられた。平野茶工場は現在も稼働可能でありながら、茶業に関する歴史的な価値と住民が抱く記憶と愛着、地域のアイデンティティの拠り所でもあると感じた。

- ・平野で採れるお茶は香りが深くて勿体無いから深蒸しには適さない。
- ・崖みtainなところで作るのは岩が多くてミネラル豊富だから。
- ・平地で大規模にお茶を作る鹿児島に生産量で負けても味には自信がある。
- ・50年前の工場がそのまま残ってるのは奇跡で、機械も生産中止となったものが多い。

調査者は、静岡にいながら製茶の奥深さを知らずにお茶を飲んでいて、各地のお茶が違う土壌・アプローチで作られ、味や香りも様々だということに気づかされた。安倍川流域で栽培されるお茶の美味しさ・香りに注目し、指名買いをしてサポートしてきた丸福製茶の情熱と現状への危機意識が感じられた。平野茶工場は現在も稼働可能でありながら、茶業に関する歴史的な価値と住民が抱く記憶と愛着、地域のアイデンティティの拠り所でもあると感じた。

## (4) 大河内小中学校ヒアリング調査

昨年度に続き澤本校長先生に今年度の取り組みについてうかがった。同校の特徴であるOFT(大河内フロンティアタイム：生活科と総合的な学習の時間・探究学習)を軸に地域と連携した

がら様々な活動を進めていた。オクシズの生産者や店が道の駅に集まった OKUSHIZU Maker's Fes で同校の児童生徒は、歌や踊り太鼓を披露し拍手喝采を浴びていた。また、OFTでお茶をアレンジした食品や入浴剤開発を進めた成果を日頃サポートしてくれている大河内地区の方々に返したいと、抹茶塩やクッキーをプレゼントしていた。OFTの活動においては地域の方と児童生徒との距離感が近く、地域の方々は子どもたちに対して協力的であり、今回見学した2つの取り組みを見ても、やはりともにOFTを実践していると感じた。



OKUSHIZU Maker's Fes に出演中の児童生徒とOFTの成果品

昨年度私たちはOFTの取り組みに大学、会社・企業等に属する地域の外の人（Outsiders）と近隣の人たち（Neighbors）も関わることによって、OFT+ON=OFTONという子どもたちを育む環境を広げるという方向性を考えたが、少なくとも近隣の人たち（Neighbors）との関係は、都市部の学校よりはるかに手厚く築かれていると感じた。努力目標はやはり地域の外の人（Outsiders）との関わりを充実させることである。先生方も、自然環境も地域からのサポート環境もよいが、都会と違って多種多様な人々とのコンタクトが少ないと危惧しておられた。大学（大学生、留学生、様々な研究領域をもつ教員・研究者）が積極的に関わるのが重要だし、地域の人々と異なる価値観・経験をもつ外国人との交流が重要ではないかと考えた。

## 4 研究の成果

### (1) 当初の計画

A. 住民・研究者・観光業者、大学、行政への聞き取り調査を行うとともに、地域の小中学校との連携をはかる。小中学校、大学、行瀬瑛、製茶・観光業者との連携・協働を進め、地域の魅力を農業、観光、移住、教育につなげる地域活性化策を検討する。

B. 中心市街地やオクシズ他地域とのネットワークづくりを進め、すでに活動を展開している組織・団体との連携・協働をはかる。

C. 企画した仕掛けやプログラムの試行を行い、小中学生を含めた多世代の地域住民や観光業者を集めた成果報告会を開催し、参加者からの評価をもとにPDCAサイクルを回して提案をブラッシュアップする。

### (2) 実際の内容

研究内容に示したように当初の計画A案は、県内外の示唆に富む取り組みを調査し、連携をはかることができほぼ予定通りだった。計画案Bについては連携・協働の対象が変更となったが部分的に達成できた。計画案Cについて期限内に実施できず、3月に実施予定である。

### (3) 実績・成果と課題

昨年度の成果を引き継ぎ、取り組み事例の視察、関係者への聞き取り調査によって再確認できた課題や可能性を検討し、次項5で示す提言・具体策を考えた。調査対象地について言えば、県外であっても共通の課題に直面している地域は多く、対応策・解決策は県内では見られないプログラムがあり、広域での連携・協働の可能性を確認することができた。一方、連携・協働を継続的なものにするためにはやはり直接交流することが大事で、どのように交流機会を維持するかが課題となる。

### (4) 今後の改善点や対策

今回の調査を通じて、現地での視察、対面でのヒアリングや交流がやはり大事だと感じた。新型コロナウイルス感染があるにしても現地でのコンタクトや交流を増やした上で、オンラインをも使いながら川根や飛騨あるいは都市部と大河内が連携・協働する場やプラットフォームを形成することが重要だと考えた。

## 5 課題提出者・地域への提言

調査地での事例調査・ヒアリングをもとに、オクシズ・大河内地区の持続可能な地域運営と茶業経営のための提案を試みたい。

### (1) "Hirano cha-kouba Living Museum & cafe"（仮称）

私たちはこれまで大河内地区の地域資源となるものを探してきたが、平野茶工場自体が重要な地域資源だと感じた。歴史を刻んだ建物や施設で飲食が楽しみ、憩いと癒しをもたらすカフェは国内外に数多い。平野茶工場もかつて栄え地域を支えた茶業をしのばせ、茶農家と住民の記憶が詰まった地域の象徴的な存在である。この施設は茶工場として稼働したまま、生きた博物館として大河内の茶業の過去と現在を展示する。来館者は製茶の現場でお茶を飲み、製品を買い、ミュージアム&カフェの敷地（平野地区全域）に出て茶葉が栽培されている茶畑に歩いていくコースもある。地域住民が自宅に眠る（貴重だが維持・管理が難しい）茶業に関わる文書や茶道具の寄贈先としても機能する。来訪者にとっては学びと癒しの場となり、地元にとってはアイデンティティ確認の場となる。



茶畑・大村邸コース

昨年・今年と視察した島田市笹間のサスイチ復元プロジェクトは、全国各地を旅したシェリー・クラークさんが笹間に惚れ込み、空き家となっていた旧庄屋宅を買い取って、往時の姿を残したまま復元し地域の文化・交流の拠点とする取り組みである。点在する家屋をカフェやゲストハウス、入浴施設に改修し、敷地をまるごとミュージアムにしたいと語っていた。

平野・大河内地区にも大村邸や大正用水など多くの歴史・文化資源があり、豊かな自然と景観にも恵まれている。平野茶工場ミュージアム&カフェがそれらを巡る起点・拠点としての役割を果たす姿を見たいし、大学生として運営に関わりたい。

## (2) 「オクシズの関係案内所」の設置

前述したように、飛騨市調査において印象的だったのは「飛騨市の関係案内所・ヒダスケ！」という仕組みだった。農業の担い手不足、空き家の問題は飛騨市においても大きな課題であった。茶畑のオーナー制度や援農ボランティア等の仕組みは各地にあるが、ヒダスケ！は、ボランティアの業務内容ではなくサポートする「地域」に焦点を当て、古民家の活用や歴史文化の発掘、広報・発信など多種多様な”困りごと”と手助けする人をつなげるシステムであり、ヒト・モノ・コトを関係づけるための案内所という仕掛けであった。飛騨地域の様々な仕事、生活、歴史文化、自然を体験しながら人と人がつながっていくプログラムであることで、サポーターも楽しみながら、学びながら、地域に関わることができ、飛騨市のファンを生むことにつながる。オクシズにぜひ導入したい仕組みである。

## (3) 「おおこうち来風」（仮称）

空き家と茶畑の担い手不足は、茶業の低迷が続き過疎化が進む地域に共通する課題である。昨年度私たちは空き家と耕作放棄茶園をセットにして貸すという仕組みを考えたが、行政が提供する空き家バンクに茶畑の情報を付加するやり方などでは実効性は期待できない。その地域で活動し、お試し移住や準備・フォローをしていく存在が重要である。その意味で、かわね来風の役割はきわめて大きい。農家と連携して実施する協力してグリーンツーリズム事業、移住・空き家対策事業、進出した企業への支援や連携事業、生活支援や就職支援、子どもたちへの教育事業など広範囲の事業に関わっているが、元々の目標が「4世代が幸せに暮らせるまち」であるからだ。そのために課題と資源を、人と人を、外と内を、観光と農を、地域づくりと人材育成を、つなぐ仕掛け・仕組みを創っている「かわね来風」は、持続可能な地域運営において非常に重要な役割を果たしているといえる。大河内地区にも課題が多くあり、また様々な取り組みをしている人たちがたくさんいる。「かわね来風」に学び連携をはかりながらつなぐ仕組みを充実させたい。

なお、小中学生を含めた多世代の地域住民や調査協力者を集めた成果報告会・交流会を3月に大河内生涯学習館で実施し、ご意見をいただく予定である。

## 6 課題提出者・地域からの評価

今回は、参考になる事例の提示をいただき、ありがとうございます。ミュージアムやカフェの設置に関しては、将来的には有望だと考えておりますが、核となる担い手の確保、地域住民のコンセンサスなど様々な課題が山積しておりますので、参考にさせていただきます。

コロナ禍でなかなか現地とのコミュニケーションが進まない中で、多くのご提案をいただき、ありがとうございました。